

調査概要

モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査は、ガンカモ類の主要な飛来地となっている湖沼を中心に調査サイトを設定し、2004（平成 16）年から調査を実施しています。主な調査内容は下記の通りです。

（1）渡り期と越冬期における個体数調査

ガン、ハクチョウ、カモ、カイツブリ、バンの仲間を対象種として、秋・春の渡り時期及び冬の越冬時期に個体数カウントを実施し、各サイトにおける調査対象種の個体数の増減傾向を把握しています。

（2）ハクチョウ類の成鳥数及び幼鳥数調査

ハクチョウ類が飛来するサイトで、オオハクチョウ及びコハクチョウの成鳥・幼鳥別の個体数をカウントします。「幼鳥率（群れ内の幼鳥数／群れ全体の個体数）」は、その年の繁殖成績を評価する指標として用いることができます。

宮城県と有明海・八代海で調査を実施しました！

新たなモニタリングサイトの設置に向けて、2020 年 1 月に宮城県と有明海・八代海で試行調査を実施しました。今回は、その結果をご紹介します。

（1）宮城県におけるハクチョウ類調査

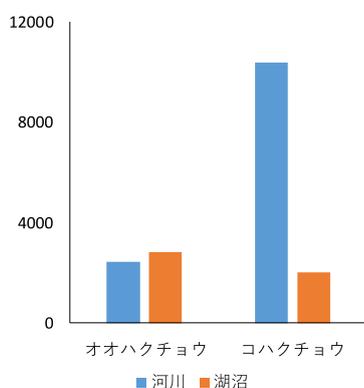


図1 ねぐら環境別の 2 種のハクチョウ類の個体数。

へ飛来していることとなり、改めて重要な越冬地であることが明らかになりました。

また、オオハクチョウは河川、湖沼それぞれをねぐらとして利用する個体数に大きな差がなかったのに対し、コハクチョウは河川を利用する個体数が多いことが分かりました（図 1）。

宮城県はハクチョウ類の主要な越冬地の 1 つです。広範囲に飛来するオオハクチョウ及びコハクチョウの個体数をより正確に把握するため、県内計 60 地点における合同調査を 2020 年 1 月 17～20 日に実施しました。本調査は「日本野鳥の会宮城県支部」、「東北大学野鳥の会」、「エイジス株式会社」、「公益財団法人 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団」との共同で実施しました。その結果、オオハクチョウ 5,415 羽、コハクチョウ 13,098 羽が記録されました。東アジア個体群の推定個体数は、オオハクチョウが 42,000～47,000 羽、コハクチョウが 99,000～141,000 羽であることから、両種とも東アジア個体群の 10%程度が宮城県



写真1 ハクチョウ類のねぐら。多いと干を超える個体が集まってねぐらをとっています。

(2) 有明海・八代海におけるカモ類調査

広大な干潟が広がる有明海・八代海では、多くのカモ類が越冬します。また、ハジロ属（主にホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ）については、全国的に減少傾向にある一方、有明海周辺で増加している可能性が示唆されています（詳細は、[2004～2017 年度とりまとめ報告書](#)にも掲載しています。）。

有明海・八代海におけるカモ類の個体数や分布状況を把握するため、「長崎県野鳥の会」、「日本野鳥の会佐賀県支部」、「日本野鳥の会筑後支部」、「日本野鳥の会熊本県支部」、「出水のツルと野生生物研究会」、「クレインパークいづみ」との共同調査



写真2 オナガガモ(左上がオスで右下がメス)。南部で多く観察されました。

を2020年1月5～25日に実施しました。その結果、カモ類205,209羽（うち、ハジロ属54,986羽）が観察されました。さらに、海域の南北でカモの種構成が異なることも分かりました。北部の長崎県諫早市から佐賀県にかけては、ツクシガモ、スズガモ、ホシハジロといった浅海域で採食する種が多く記録されました（図2）。一方、南部の熊本県・鹿児島県ではマガモ、カルガモ、オナガガモ（写真2）、ヒドリガモといったマガモ属の種が多く記録されました。北部は広い干潟がツクシガモやハジロ属の餌場になっていますが、南部よりも水田の裏作が盛んなことから、マガモ属の餌になる落ち穂が少ないと考えられます。そのため、稲刈り後（冬期）の水田に落ち穂が豊富な南部で、マガモ属が多いのではないかと考えられます。



図2 有明海・八代海のカモ類の分布

今回調査を実施した両地域とも、ガンカモ類にとって重要な越冬地である事が改めて明らかになりました。新たなモニタリングサイトとして、今後も調査を継続していきます。